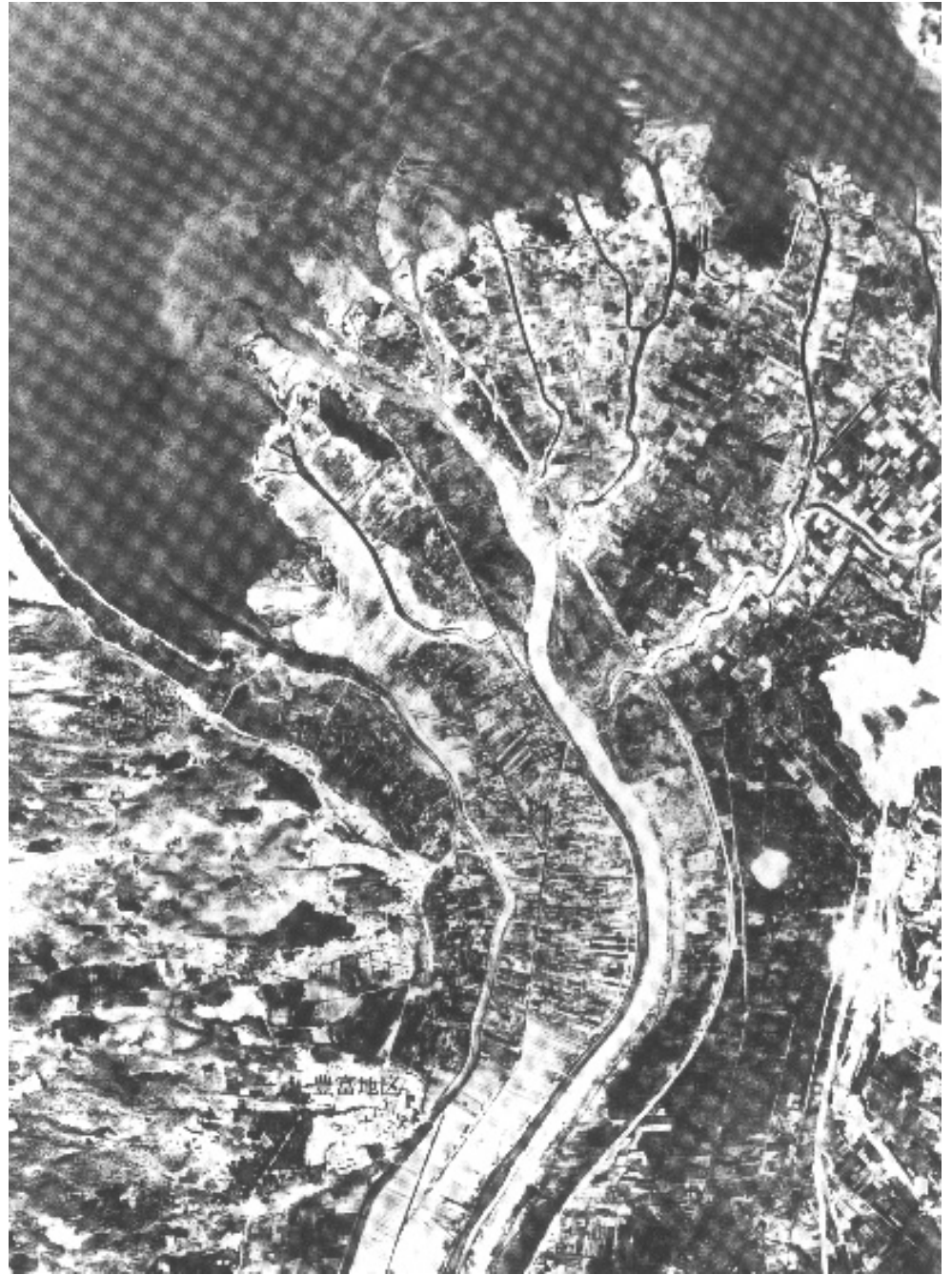


# 考古学からみた十三湖周辺地域

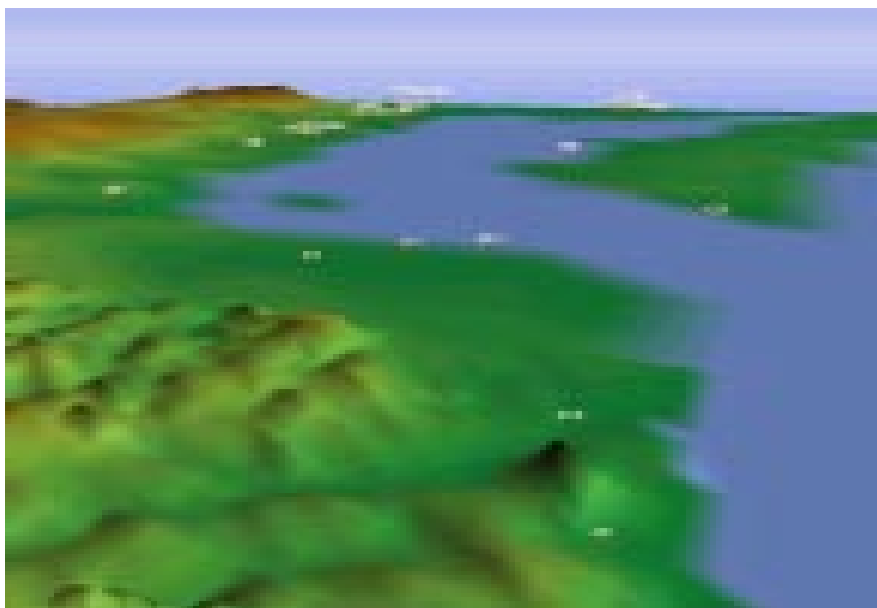
十三湖は、津軽平野の北端、岩木川河口に位置する汽水湖です。歴史的には「十三瀉」「後瀉」とも称されます。岩木川・山田川・鳥谷川・今泉川・薄市川・相内川等が流入し、湖西部にある水戸口で日本海と接しています。

現在は面積 18 平方km、周囲 20 km、平均水深 1.5m と非常に浅い湖ですが、温暖化による「縄文海進」時には、内陸部に大きく湾入する大湖「古十三湖」であったと推定されています。

平野形成の研究で知られる海津正倫氏は、津軽平野周縁における最下位段丘である牛瀉面（海拔 4 ~ 5m）ならびに、藤枝・大沢内など谷の出口付近に認められる微高地（海拔 3 ~ 5m）が縄文海進のピーク時に形成されたと仮定し、それぞれの



改修前の十三湖



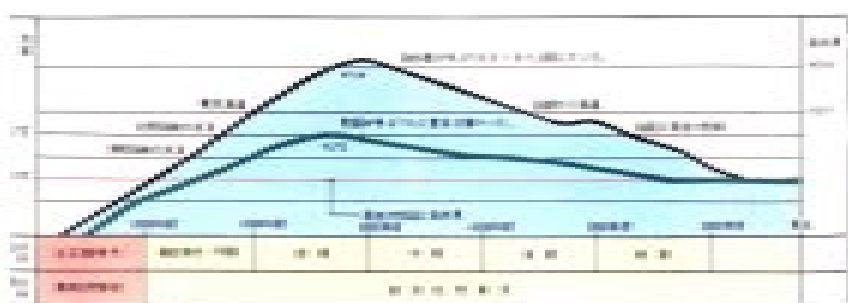
古十三湖推定図

海拔を基に古十三湖の汀線高度を 4m 前後、汀線は五所川原市付近に達すると推定しました。

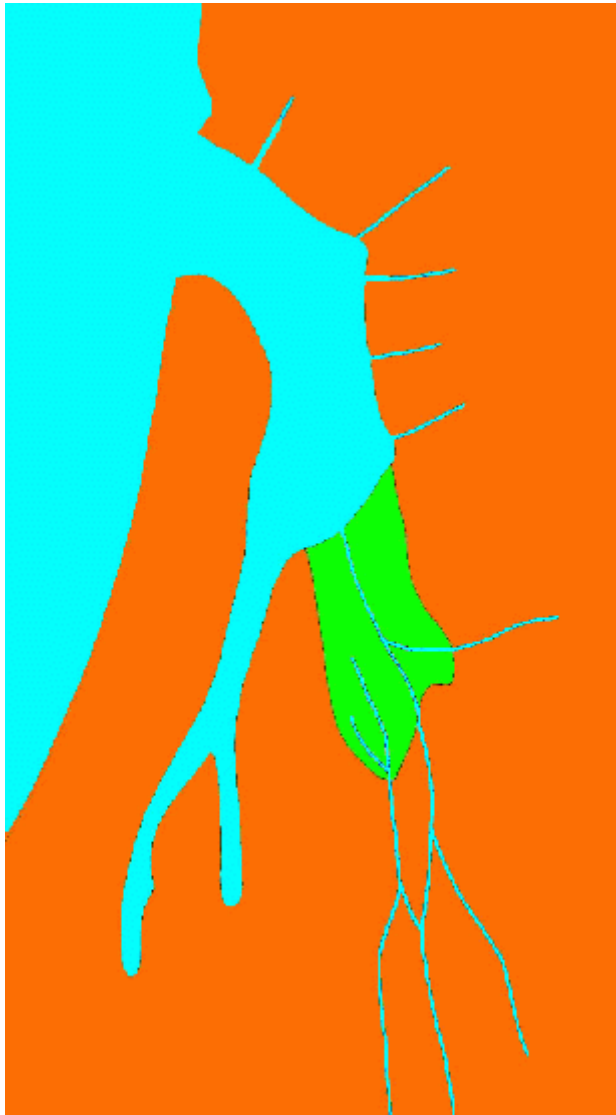
縄文海進のピークは、6,000 ~ 5,500 年前頃、すなわち縄文時代前期頃とされ、そのころから古十三湖に面した台地上では人々の進出が活発となります。豊かな自然環境を背景に、定住生活が本格化したと考えられ、遺跡や貝塚が急増します。

集落の人々は、新潟産のヒスイや北海道産の黒曜石を用いていましたが、これらは古十三湖に繋がる日本海を経てもたらされたものと考えられます。

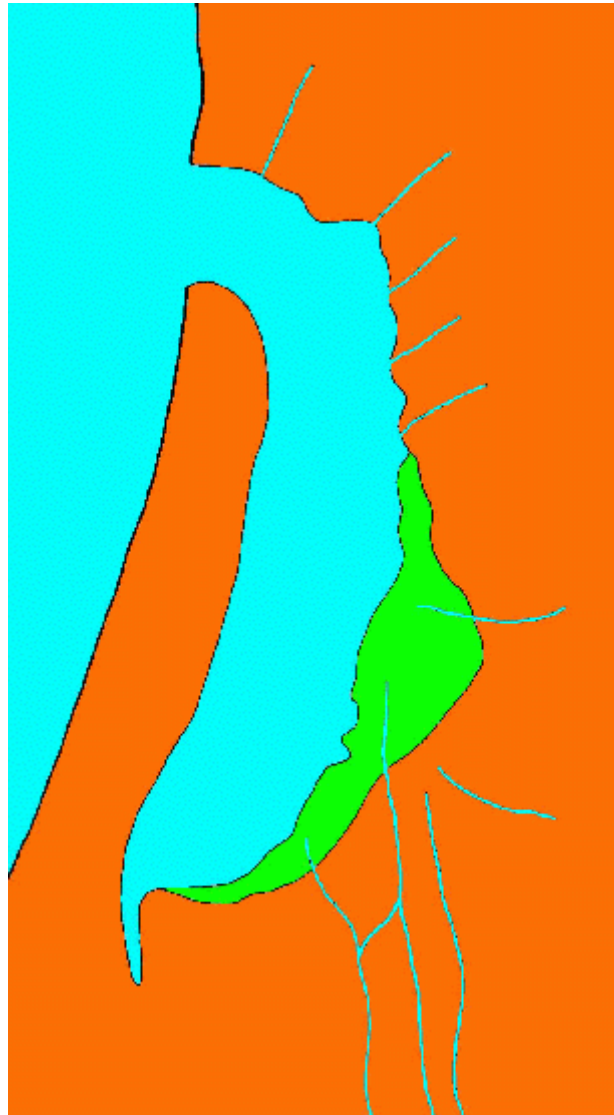
豊かな生活をもたらした古十三湖は、河川



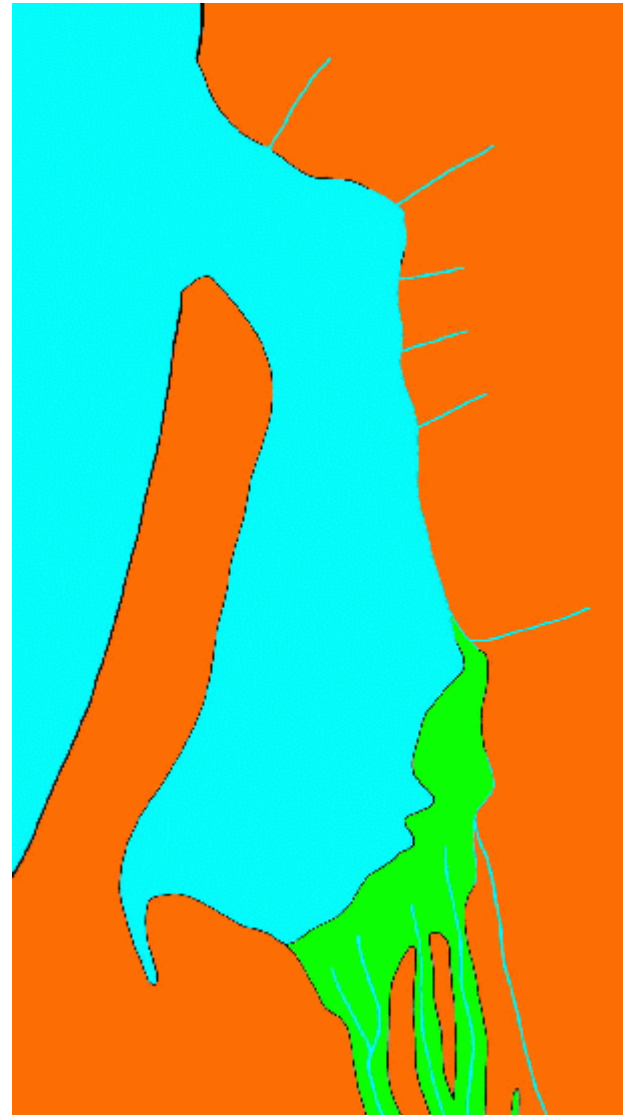
気温変化と海水準



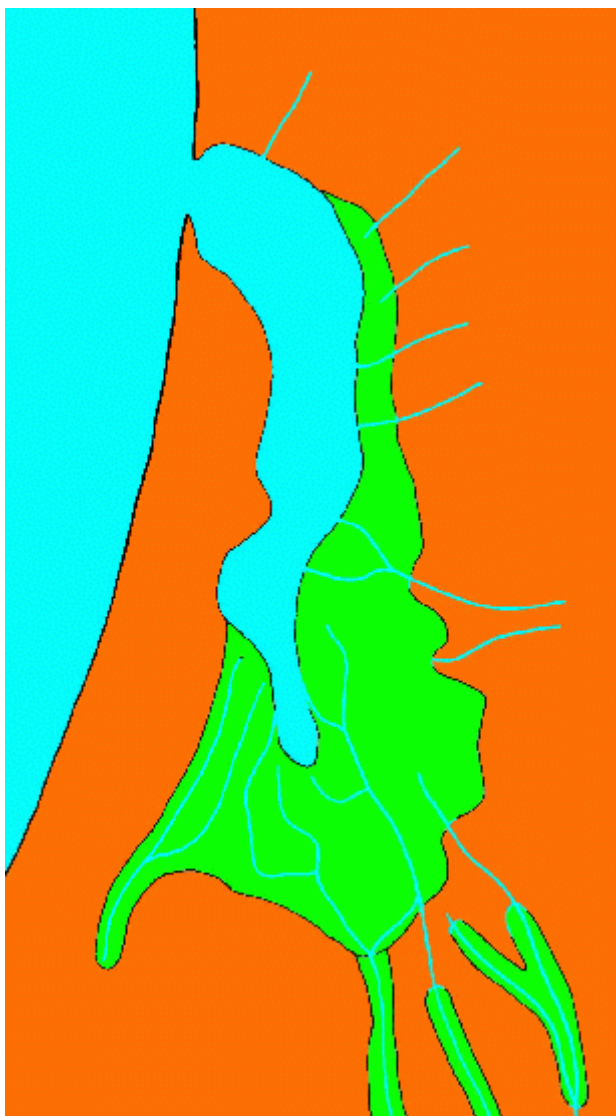
縄文時代草創期の津軽平野



縄文時代早期の津軽平野



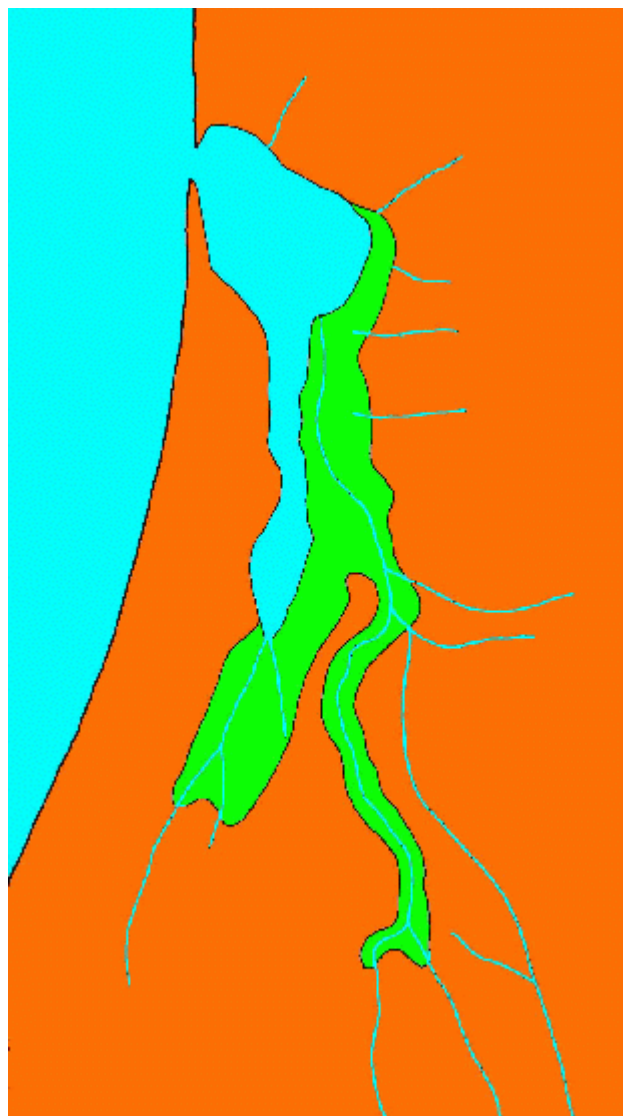
縄文時代前期の津軽平野



縄文時代後期の津軽平野



縄文時代晩期の津軽平野



現在の津軽平野

の堆積作用などによって縄文時代後期以降次第に縮小し、縄文中期の小海退（5,000～4,000年前頃）、弥生の小海退（3,000～2,000年前頃）期を経て、約1,000年前に相当する平安時代後期には現在の大きさに近づくとされます。

平安時代には、十三湖岸沿いの台地には柵と空壕に囲まれた区画集落が点々と連なっ

ていました。山々を刻んで作られた区画集落は、一端廃絶した後、**中世豪族安藤氏**によって城館へと改築され、**南部氏**との抗争の舞台となりました。

安藤氏は、十三湖水戸口付近に拠点を構え、**日本海交易**に力を注ぎました。中国や朝鮮、あるいは国内各地の陶磁器などを輸入していましたが、その交易ルートを担当したのは、やはり十三湖でした。**江戸時代**に至っては、十三湖は藩内外の物資が行き交う大動脈に成長し、多くの川船が往来しました。



平安時代の区画集落



十三湖干拓の様子

地域の発展とともに十三湖は縮小を続け、**明治初期**には4,882ha、**大正元年**には2,155haにまで小さくなっています。また、戦後の食糧難に端を発した国策**十三湖干拓事業**は、数十年の歳月と引替えに茫漠たる葦野原を、肥沃な穀倉地帯へと変貌させましたが、同事業の推進により現在は1,770haと明治初年に比べても1 / 3近くの面積になっています。

現在では、まさしく太宰治が形容するところの「**浅い真珠貝に水を盛ったような**」湖であり、かつての大湖の面影はほとんど感じられません。しかしながら「十三湖」は、地域に住む人々にとって、豊富な水産資源を提供する場であり、遙か北方世界や大陸へと向かって開け放たれた玄関口であり、またある時は文化や物資などあらゆるものの導水管の役割を果たした「**豊饒の海**」だったといえるでしょう。

海津正倫 1976 津軽平野の沖積世における地形発達史 地理学評論 49-11

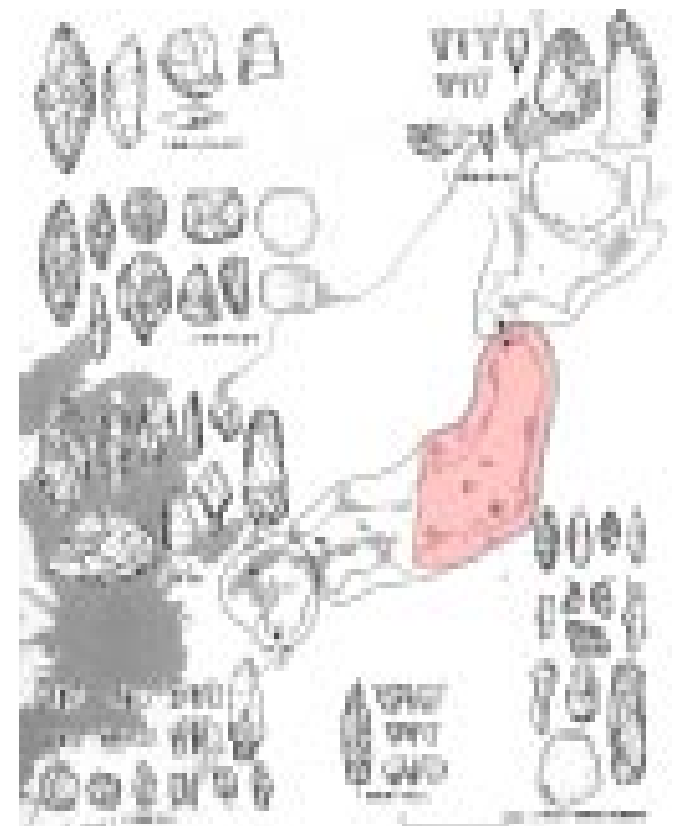


# 旧石器時代

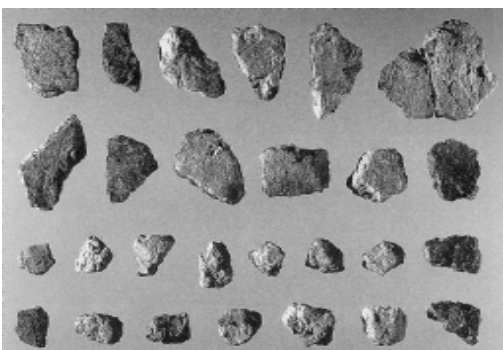
アジア大陸の東のはしにあった日本列島は、約1500万年前より東へ移動し、200万年前ころにはほぼ現在の形になりました。数度の氷河期には、気温が下がり、山にはエゾマツなどの針葉樹林が広がっていました。

海は100m以上も低くなって、北海道と青森県の間は歩いて渡れるようになったとされますが、約20,000年前頃には、津軽海峡を隔てて北海道と本州は石器製作の文化が異なっています。十三湖周辺は本州の文化に含まれていたといえるでしょう。

旧石器時代の遺跡は、全国で4,000ヶ所以上発見されており、青森県では、下北半島・津軽半島を中心に、2万年から1万年前の旧石器時代遺跡が、約20ヶ所発見されています。十三湖周辺では現在のところ、**金木町相野山遺跡**・**木造町丸山溜池遺跡**など数ヶ所発見されているに過ぎません。あるいは海の底に眠っているのかも知れません。



# 縄文時代



無文土器（大平山元 遺跡）

1万数千年前最後の氷河期が終わりますが、そのころ**土器**が発明され、食料を煮て食べることができるようになりました。**蟹田町大平山元 遺跡**で

発見された、模様のまったくない**無文土器**などが、青森県で最初の土器と考えられています。

土器の出現によって、数百万年間続いた**旧石器時代**はおわり、**新石器時代**へと入ります。日本では、普通この時代を**縄文時代**と呼び、その土器を**縄文土器**と呼んでいます。縄文時代は、約15,000年前からはじまり、最初の土器の時代から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時期をへて約2,300年前まで続きます。



縄文土器の移り変わり

縄文時代に入ると温暖化が進み、約5500年前縄文時代前期にピークに達します。海面は現在より4～5mも高くなり、北海道と青森県は、現在のように津軽海峡で分けられるとともに、五所川原以北の津軽平野は湖水に覆われました。

山々は、それまでの針葉樹林から、ドングリ・クリなどの、実を食べることができる落葉広葉樹林へと変わり、キツネやイノシシのような小型の動物が増えたと推定されます。また古十三湖の沿岸は、シジミ貝や魚がたくさんとれ、人々がムラをつくりはじめ、中里町深郷田遺跡や、市浦村オセドウ遺跡のような貝塚が形成されます。



縄文時代の植生と動物



古十三湖と縄文時代前期の主要遺跡



竪穴住居(深郷田遺跡)



復元住居(三内丸山遺跡)

当時の人々は、竪穴住居と呼ばれる建物を作って住んでいました。竪穴住居の中を発掘すると、土器や動物の骨、貝殻などが多量に出土し、当時の食糧事情をうかがうことができます。

この時期が、実質上の十三湖周辺の歴史のはじまりといっても良いでしょう。このころの人々が使っていた土器を、専門的には「円筒下層式土器」と呼びます。

円筒下層式土器を使用していた地域範囲は、北海道の道南部から東北地方の北部にかけてで、普通この圏域を「円筒土器文化圏」と呼びます。



円筒下層式土器



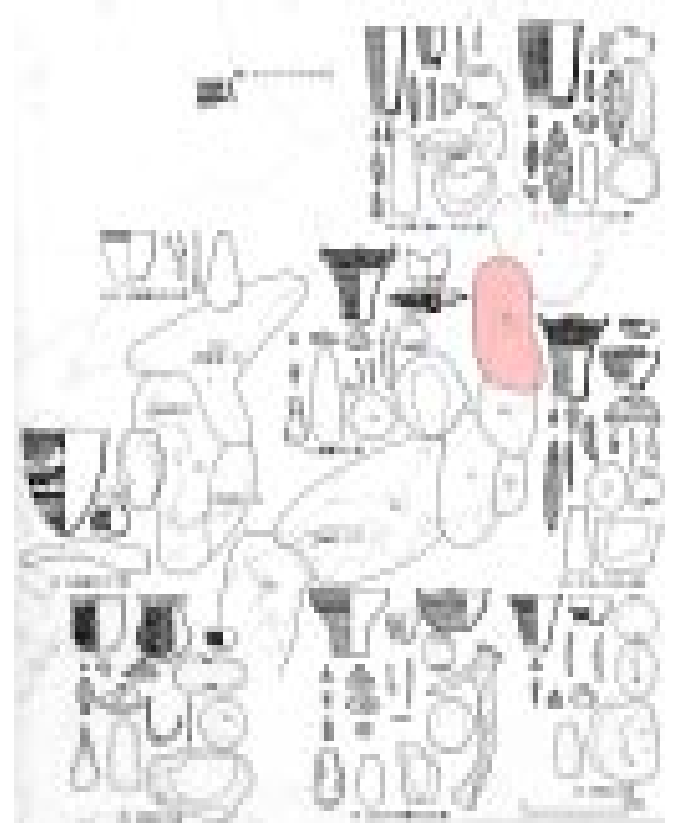
貝塚から出土した遺物(深郷田遺跡)



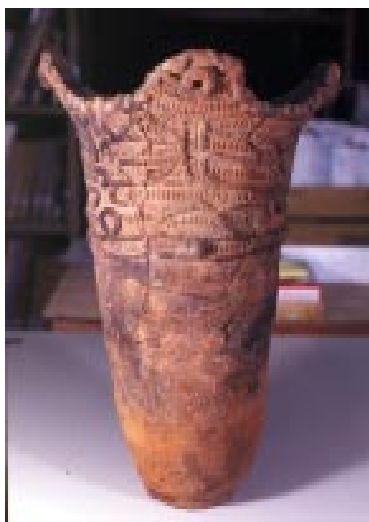
縄文時代の食事

円筒土器文化圏は、その後縄文時代中期の「**円筒上層式土器**」、後期の「**十腰内式土器文化圏**」、晩期の「**亀ヶ岡土器文化圏**」というように、この北海道と東北北部北奥羽が一体化した地域圏が長期間にわたって繁栄を続け、その中心地は青森県だったと考えられています。

とくに、晩期の亀ヶ岡文化は、南下を続けついには東日本を覆ってしまいました。例えば、**石刀・石剣**と呼ばれる祭祀用の道具も、北奥羽で発明され、関東はおろか九州方面まで広がっていきました。円筒土器文化圏として成立した文化圏は、文化の中心地 情報発信地 としての役割を果たすまでになりました。



縄文時代の文化圏



円筒上層式土器



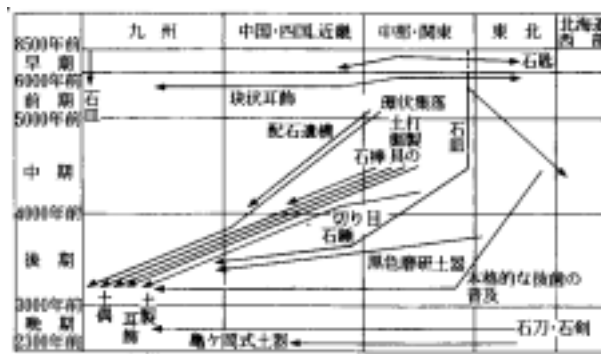
十腰内式土器



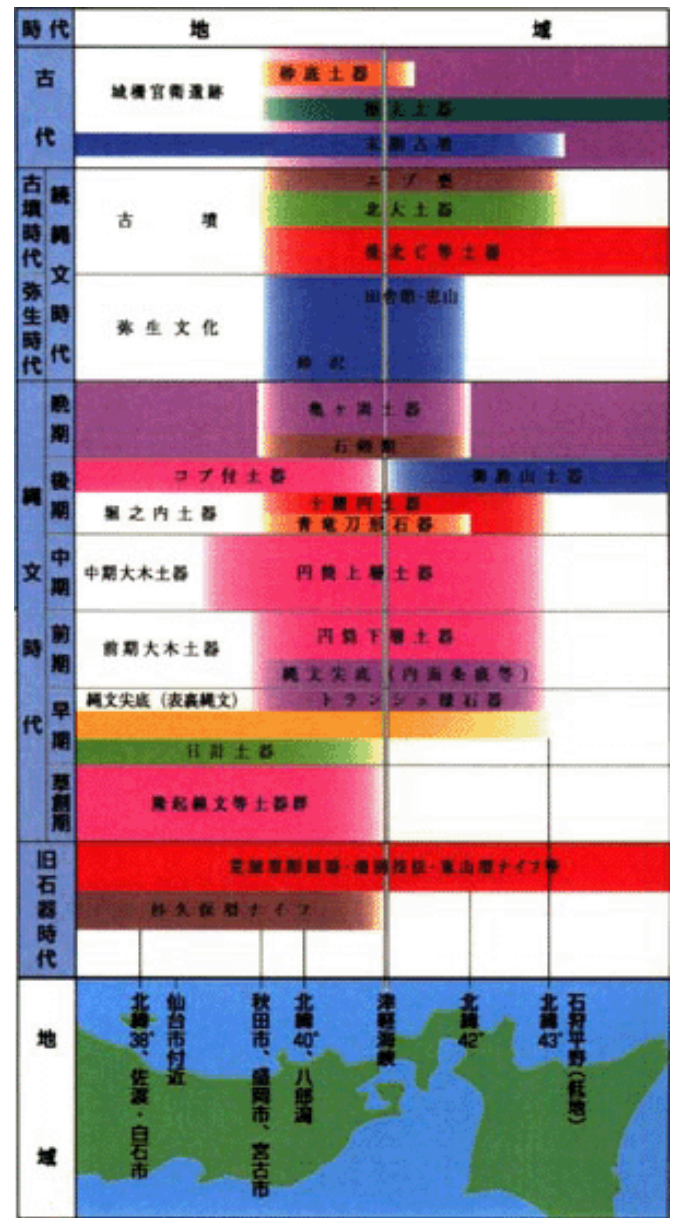
亀ヶ岡式土器



石刀・石剣



亀ヶ岡文化の広がり



円筒土器文化圏の変遷

## 弥生時代

長らく繁栄を続けた縄文文化ですが、大陸から九州方面に米を作る技術がもたらされ、**弥生時代**がはじまるとともに終焉を迎えます。

米作りは、九州地方からすみやかに青森県に伝わり、**弘前市砂沢遺跡**や**田舎館村垂柳遺跡**などの弥生遺跡からは、水田の跡や、弥生土器・米作りの道具などが発見されています。



水田跡 (田舎館村垂柳遺跡)

十三湖周辺においては、弥生時代の遺跡は少なく、水田跡も発見されていません。ただし金木町神明町遺跡や車力村乗鞍遺跡から弥生土器が出土しているため、一時的に米作りの文化が及んでいたのかも知れません。

弥生時代の終わりころになると、米作りは気候の寒冷化などにより急速におとろえ、遺跡の数も少なくなります。



天王山式土器  
(岩崎村小磯遺跡)

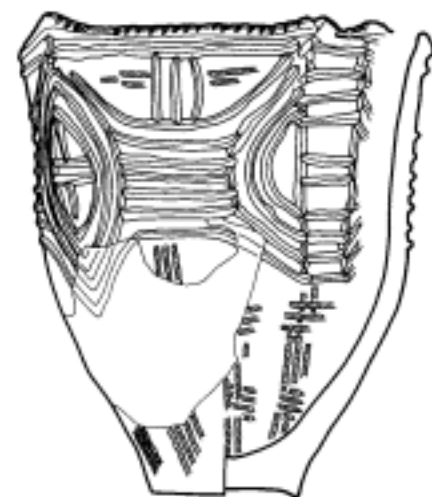


弥生時代の文化圏

円筒土器以来、嘗々と続いてきた道南・北奥羽文化圏も破綻し、弥生時代後期には東北南部を中心とした天王山式土器文化圏に含まれるとともに、津軽海峡を隔てて北海道と分断されてしまいます。

## 古墳時代

弥生時代がおわると、近畿地方では、前方後円墳と呼ばれる巨大な古墳が造られます。これらの古墳文化は、しだいに九州から東北地方南部にも波及してきます。前方後円墳が造られた時代を古墳時代と呼び、4世紀から6世紀まで続きますが、北奥羽ならびに北海道では古墳が、発見されていません。



続縄文土器(木造町神田遺跡)

このころ北海道では、米作りを受け付けず、植物採集・狩猟・漁撈活動を中心とする縄文時代さながらの「続縄文文化」が継続し、時により東北地方にも影響を及ぼしました。遺跡数が少ないため、続縄文文化の様子はあまり詳細にわかっていませんが、近年梵珠山麓において、複数の遺跡から続縄文文化の土器が出土しています。

また五所川原市隠川(11)遺跡では、北海道系の続縄文土器と古墳文化の土師器と一緒に出土しているため、北から来る文化と南から来る文化の交流する地域としての役割を果たしていたと考えられます。



古墳文化と続縄文文化

# 飛鳥時代

1400年前(7世紀)の飛鳥時代になると、大和朝廷が急速に領地を拡大し、国内のほとんどを治めるようになります。このころには道南・北奥羽地方に住む人々は、蝦夷と呼ばれていましたが、結局は大和朝廷にしたがったようです。

県南方面では、このころ造られた終末期古墳とよばれる遺跡がいくつか発見されています。これらの古墳からは、武器や馬具・玉・土器などが出土し、大和朝廷に服属した蝦夷の首長が埋葬されたものと考えられています。

残念ながらこのころの十三湖周辺を含めた津軽地方の状況は、遺跡も少ないことも手伝って明らかではありません。



終末期古墳(八戸市丹後平古墳)

# 奈良時代

前後して、中央では大化の改新によって律令国家が誕生しました。律令国家は、全国の土地と人びとを直接支配する体制をめざし、とくに1300年前(8世紀)都が奈良の平城京におかれ、奈良時代になると、いよいよ東北地方への進出をつよめました。

多賀城や秋田城に代表される律令国家の東北進出は、津軽地方にも大きな影響をあたえました。この当時、国家の直接支配に入った地域は郡制がしかれており、秋田郡・岩手郡までが律令国家の支配下に置かれました。

津軽地方は、こうした律令国家、即ち日本国の範囲外でしたが、文化面では律令国家の影響をつよく受け、北海道とは津軽海峡を隔てて再び分断されるようになります。

十三湖周辺でも、五所川原市観音林遺跡出土丸靴や市浦村中島遺跡出土の土師器など、律令国家に関わる資料が散見されます。



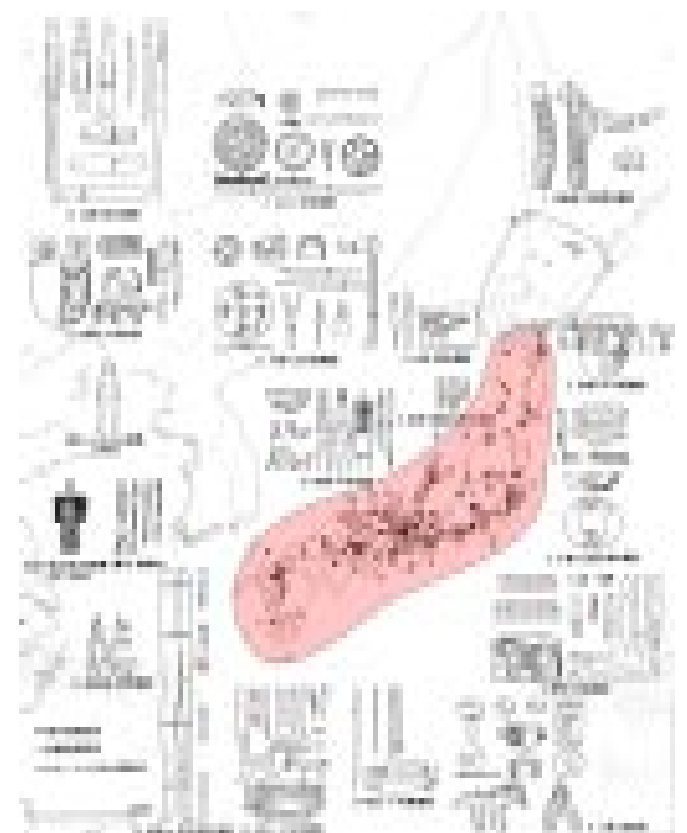
丸靴(五所川原市観音林遺跡)



土師器(市浦村中島遺跡)



律令国家  
古代の郡制



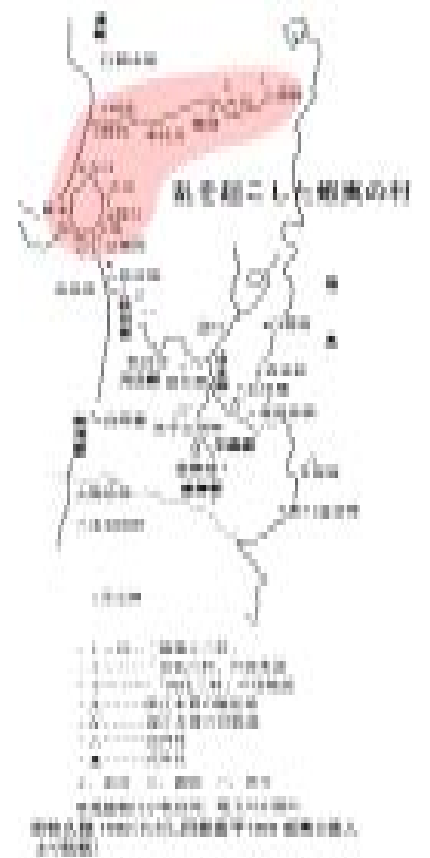
奈良時代の文化圏



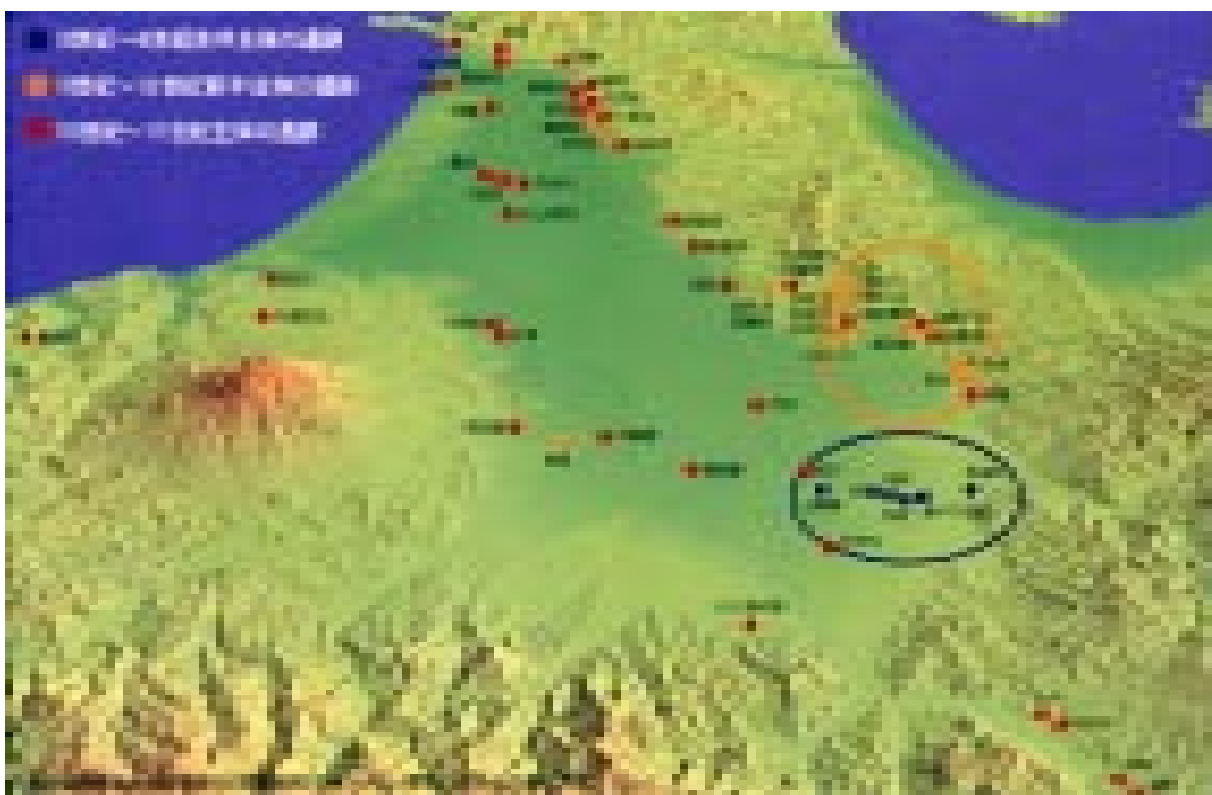
# 平安時代

平安時代前期、秋田県米代川流域の蝦夷の村々が**秋田城**を襲う事件がありました（**元慶の乱**）。この乱の前後から津軽地方の人口は一気に増えはじめ、浪岡・五所川原周辺に多くの集落がつくられるようになります。この頃の集落の急増については、律令国家の苛政を嫌った人々が、津軽地方へ逃散したためとする説があります。

十三湖周辺においても、**中里町深郷田遺跡**・**大沢内遺跡**などのように、低地に面した丘陵部に複数戸からなる集落が営まれ、鉄製の**農具**を使用して、**畠**や**水田**の開発をおこなっていたと推定されます。また十三湖周辺では、**網漁**が盛んに行われたと考えられ、土錘などの漁具が多く出土しています。



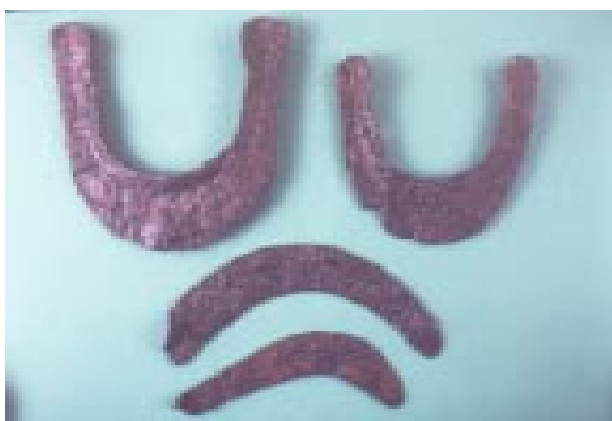
元慶の乱関係図



古代集落の分布と広がり



土錘の使用法



鉄製農具



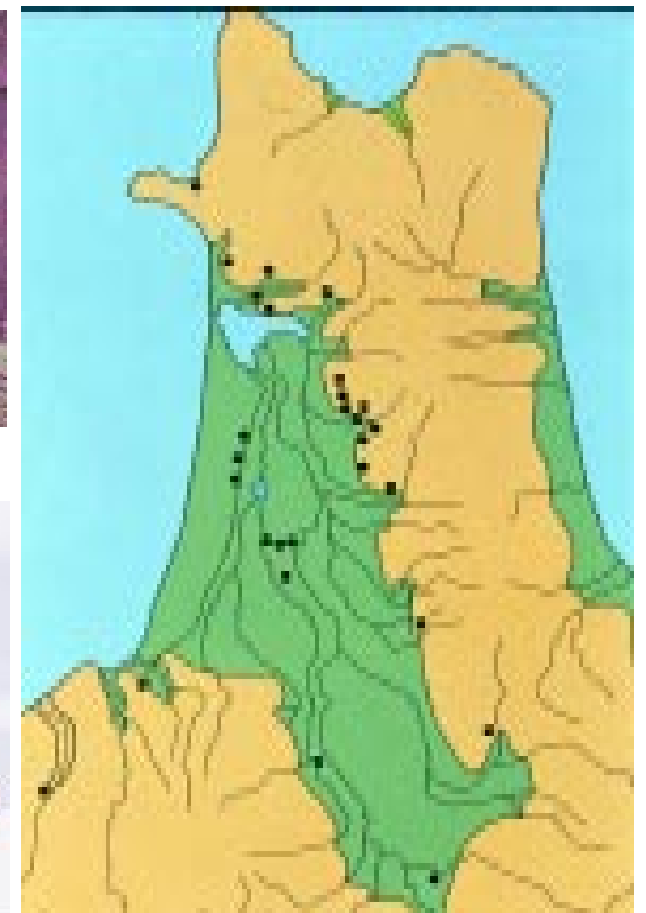
古代の畠跡(下田町中野平遺跡)



炭化米(中里城遺跡)



古代の食事



土錘の出土分布

当時の住居は、地面を方形あるいは長方形に掘りくぼめ、柱を立てて屋根をかける**竪穴建物**で、寝食のほか**鍛冶**や**薦編み**などの作業もおこなわれました。このころ使われた土器は、古墳時代から用いられている**土師器**や**須恵器**です。



竪穴建物（中里城遺跡）



竪穴建物模型



須恵器窯（五所川原市犬走（1）遺跡）



須恵器窯模型

須恵器は、五所川原周辺で生産されたものが多く使用されました。また、文字が書かれた土器や、仏教関係の遺物が多く出土しており、文化面でも充実してきた様子が見られます。



土師器（中里城遺跡）



須恵器（神明町跡）



「大佛」刻書須恵器(鳥海山遺跡)

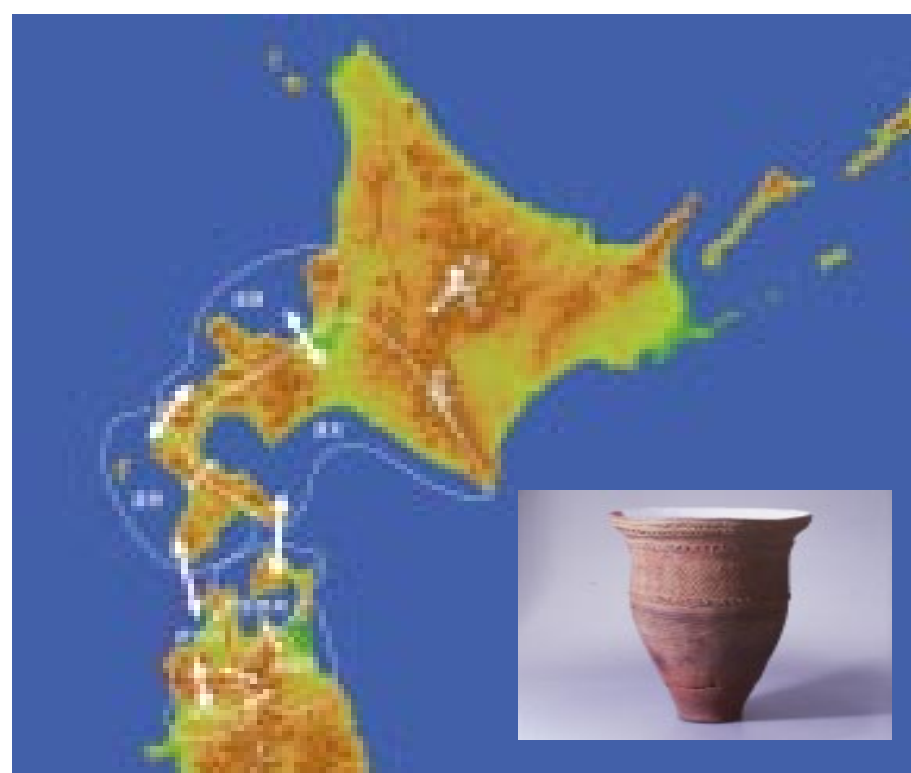


宗教具（尾上町五輪野遺跡）

## 平安時代

平安時代後期律令国家が衰退しはじめると、津軽地方は再び北海道と交流が深まり、円筒土器文化圏以来の道南・北奥羽文化圏を形成するようになります。**擦文土器**と呼ばれる北海道系の土器や、タカの羽・クマの皮、コンブなどがもたらされ、海峡をまたいだ広大な経済圏が成立しました。

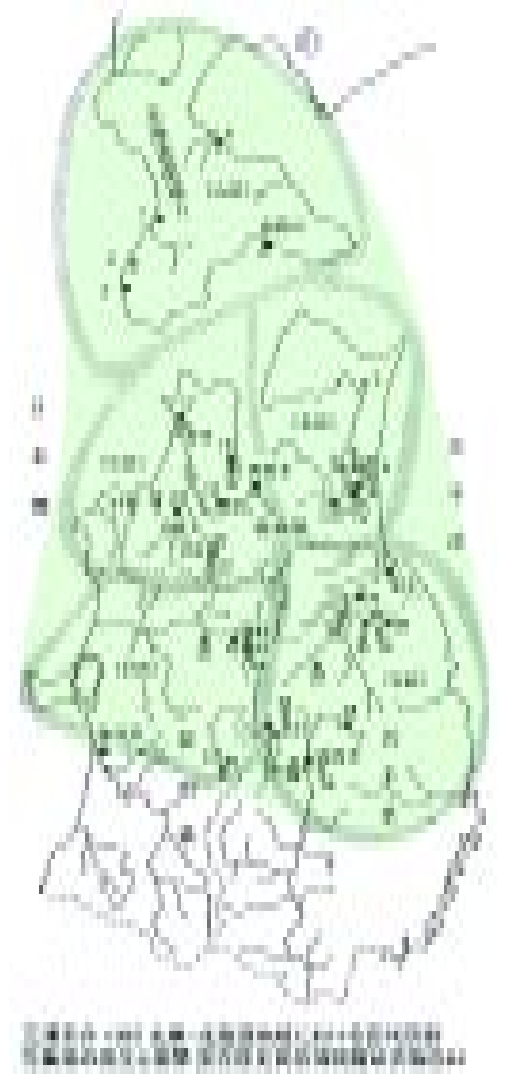
北方世界と国家の境界域に位置した津軽地方は、環日本海地域の交易拠点と位置づけられ、十三湖周辺はその導入口の役割を果たしたと考えられます。



古代の交流模式図と擦文土器（蓬田村小館遺跡）

津軽地域の各集落は、米・鉄など生産の増大とともに、広大な北奥羽・北海道文化圏を背景に発展していきますが、土地・水・交易などの利権を巡って集落同士が対立することもあったと考えられます。十三湖周辺では中里城遺跡をはじめ、市浦村唐川城遺跡・車力村豊富遺跡など空壕・柵列などの区画施設を巡らす集落が出現します。「防御性集落」「区画集落」と呼ばれるもので、北奥から道南にかけてのみ見られる特殊な集落です。

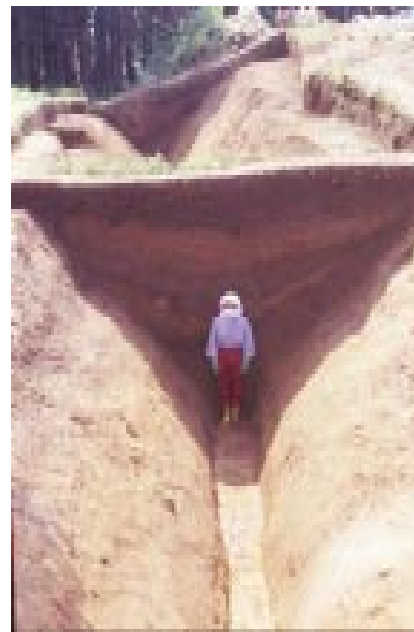
同集落は、中里城遺跡の例からは、短期間の存続であり、最後は再び区画施設を埋め戻して終焉を迎えると考えられます。区画施設に伴う12世紀代以降の資料がないことから、遅くとも12世紀代に入るまでにはほとんどの防御性集落が廃絶すると考えられます。おそらく、その過程で地域の政治的な再編成が進み、より広域を支配する在地豪族層が登場するのでしょうか。それらの新興勢力はやがて奥州藤原氏によって統合され、平泉政権が誕生します。



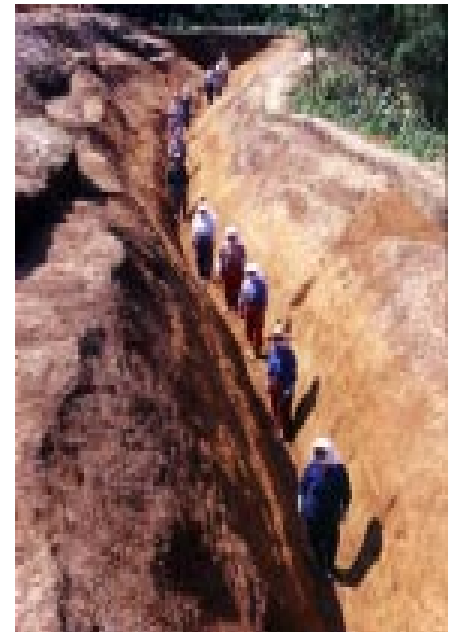
区画集落の分布



区画集落模型



空壕跡（中里城遺跡）



空壕跡（中里城遺跡）



十三湖周辺の区画集落



土師器・擦文土器（中里城遺跡）

# 鎌倉時代

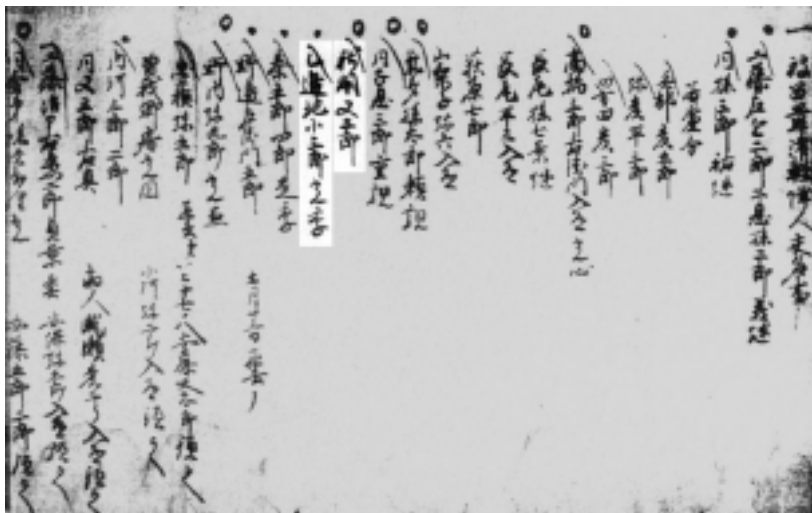
北奥の覇者奥州藤原氏の栄華も長くは続かず、源頼朝に攻められ滅亡します。鎌倉幕府の支配は津軽地方にもおよび、このとき津軽地方も日本国に編入されました。十三湖周辺も、「西浜」として治められるようになりますが、この頃の様子はよくわかっていません。遺跡が激減するためですが、中里町一本松遺跡や五林神社付近から出土した遺物、あるいはまた五林神社の御神体である五輪塔が、数少ないこの頃の資料と考えられます。

文献面では『津軽降人交名注申状』(建武元年・南部家文書)に新関又次郎並びに乙辺地小三郎光季という武将名が見え、前者を中里城主、後者を尾別城(尾別館)主にあてる説がありますが(中里町誌)現在のところ両遺跡ともにその頃の遺物は確認されていません。

歴史的には、この頃津軽地方の豪族安藤氏が藤崎から十三湊に拠点を移したとされます。安藤氏は、北条氏の土地を管理するとともに、北方の支配をまかされ、「西浜」を中心に勢力を誇るようになってきます。



鎌倉時代郡制



津軽降人交名注進状(南部家文書)



珠洲系壺(中里町五林出土)



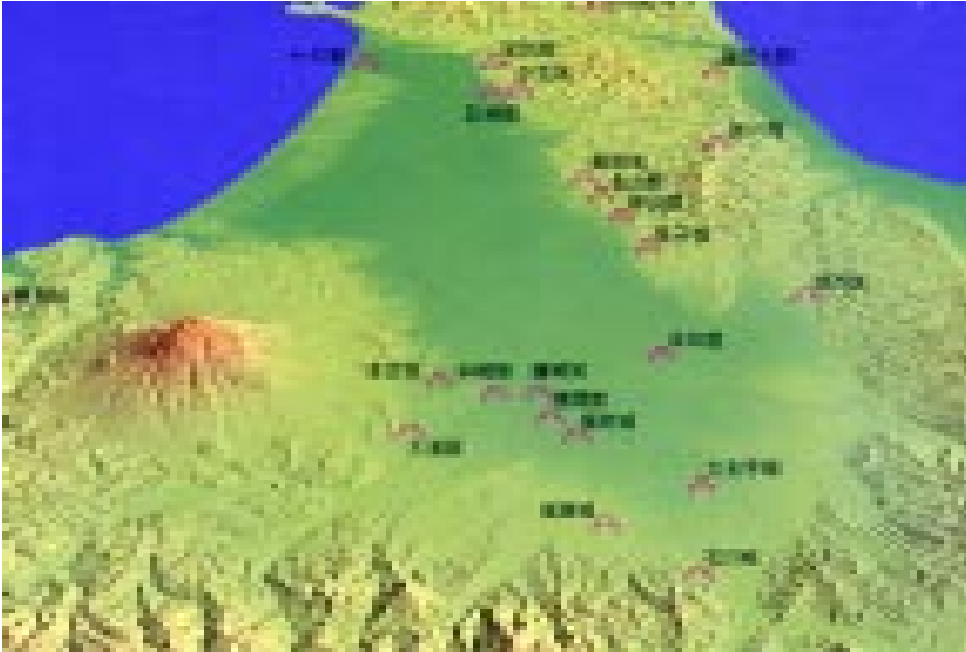
五輪塔(中里町五林神社)

# 室町時代

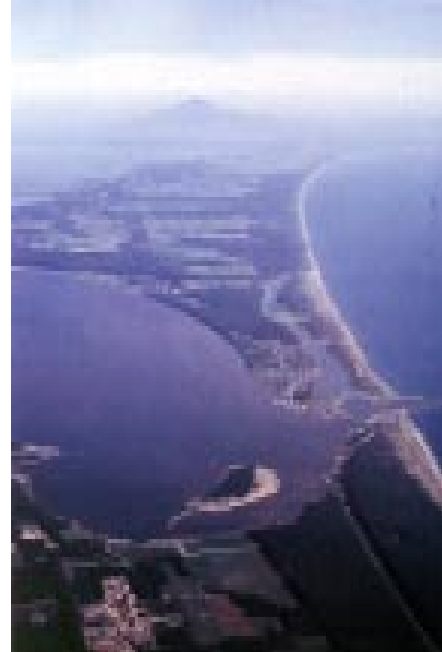
建武の新政を経て、室町幕府の時代となりますが、津軽地方に残された板碑・五輪塔などの供養塔は、主にこの頃に建てられたものです。板碑は石に梵字や「南無阿弥陀仏」などの名号を刻み、供養に用いられたものですが、鱒ヶ沢町・深浦町・市浦村など西浜地方に所在するものは、安藤氏によって建立された可能性が強く、互いによく似た形・構成で、一つの地域としてのまとまりを感じさせます。

足利将軍に莫大な物品を献上するなど、北奥に制覇を唱えた**安藤氏**も、15世紀前後には**南部氏**の進出によって足下が揺らぎ始めます。安藤氏は、五所川原市から小泊村にかけての街道(**下ノ切道**)ぞいに、多くの城館を造り、南部氏との争いにそなえました。古代の防御性集落は、かなりの確率で中世城館に再利用されています。

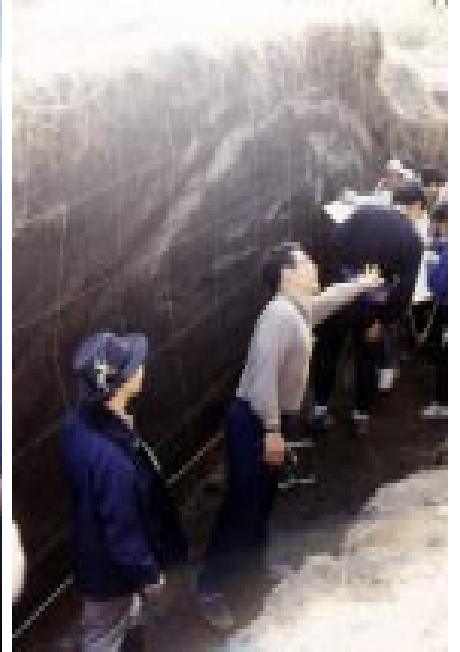
安藤氏は、15世紀前半頃には南部氏に敗れ去り、**小泊村柴崎城**から北海道へ落ち延びたと伝えられますが、**市浦村十三湊遺跡**や**中里町中里城遺跡**からは、そのころの遺物が多く出土しています。



中世城館の分布



十三湊遺跡



増築された土塁(十三湊)

## 戦国時代

続く**戦国時代**は、十三湖周辺においては、考古学的な空白の時代となり、遺物が全く出土しない時期となります。これは**十三湊遺跡**においても同様の現象であることから、当該期安藤氏が撤退してからは、陶磁器等を使用する人々が消失するとともに、陶磁器の流入ルートが変更されたことによるものと考えられています。

## 江戸時代

一世紀あまりの空白を経て十三湖地域が再び歴史に登場するのは、**安土桃山**以降のことです。**肥前陶磁**などが、**十三湊遺跡**を中心に出土するようになり、岩木川・十三湖が再び物資の大動脈となります。江戸時代前期の絵図には、十三湖周辺の村落が数多く記載されています。

文献等によれば、中里・宮野沢・深郷田(八幡)等**金木組**に所属する村々は17世紀前葉、大沢内・宮川ほか岩木川下流域低湿地帯に広がる**金木新田**に所属する村々は、17世紀後葉～18世紀前葉の開拓と考えられます。

